

四分と量智に就て

——唯識四分説の一部として——

富貴原章信

一

また唯識論に依れば、第二分は……或は量にも非量にも、或は現にも比にもあり。……第三と第四とはみな現量に攝むとある。して見ると見分は現量・比量・非量ひいの三量に通じ、自證分と證自證分とは唯だ現量となる。凡そ現量と云へば、理門論には、若し智あつて、色等の境に於て、一切の種類と名言との、假立の無異の諸門の分別を遠離し、不共縁に依て、現々別に轉ず。故に現量と名くとある。思ふに現量は能縁の智に對して、必ずしも超越的な對境を要するのではないが、併し五識に就いて云へば、色聲等の對境を要するのである。而して次に一切の種類と名言との假立の無異の諸門の分別を遠離するといふは、因明論の慈恩疏(三)に引用されて、三釋に依て解釋してある。初めにその第一釋は、その中、種類とは即ち勝論の大有と同異と、及び數論の三徳等であり、次に名言とは即ち短なるものを長となす等、また假立とは即ち實に稱はないもの、また無異とは即ち共相

に依て轉ずること、また諸門とは即ち二十三諦と及び六句の中の常無常等であるとしてゐる。次に第二釋は、名言が一ではない點に於て種類とし、また名言に依て一法を假立して、諸法を貫通する點に於て無異とし、また遍宗と定有と遍無とを諸門とするとしてゐる。次に第三釋は無異と諸門とを二とし、而して比量と外道の邪説とを離れるのが現量であるとするが、併しこの第三釋は、溜州の續疏に於ては、略されてゐる點に徴すれば、餘り重んぜられてゐないことが知られる。而して明證の裏書に依れば、この第一釋は、假の名言と勝論數論を簡んでゐるが、併しその他の外道、及び比量心を簡んでゐないこととなり、また第二釋は、假の名言と及び比量心の所縁とを簡んでゐるが、併し外道を簡ばないことになり、また第三釋は、たゞ外道を簡ぶのみであるから、從つて名言と及び比量心の所縁を簡んでゐないとしてゐる。して見ると理門論の文を、慈恩の如く考ふれば、三釋とも孰れにしても、盡理の釋とは云へない。次に印度哲學研究に依れば、慈恩の三釋は何れも正當な點は少く誤つてゐるとある。例へば慈恩の種類とは、勝論の大有や同異や數論の三德などを指すのであるが、併しこれは全く臆説であつて、陳那が自ら種類の語は、個々のものを言ひ表はすのではないと云ふ點よりすれば、實は類概念の如き意味であるとしてゐる。併しそれは兎に角、凡そ名言も種類も分別に屬することは言ふ迄もない。而して此の分別は判斷作用と云ふ如きものであつて、而もかの現量がこの分別作用に於て、表はれるとは云へない。現量は分別一切を、一切の概念

作用を離れて、初めて表はれるのである。凡そ理門論に、現量は一切の種類と名言との、假立の無異の諸門の分別を遠離するとあるは、以上の如く考へられるとすれば、これは因明論に、現量は名種の有ゆる分別を離れるとあるに同じいであらう。

(一) 卷二、二八右

(二) 大正三二、三

(三) 下末一五左

(四) 續藏八六、四四二左

(五) 下末(大正六九、二三七)、大疏抄第三九(大正六八、七五九)引

(六) 卷五、六三七頁

(七) 大正三二、一二

次に現量が不共の縁に由ると云ふに就て、西明の三釋がある。^(八)初めにその第一釋は、不共の別依

が増上縁となつて、よく眼等五識の現量を生ずること、次に第二釋は、五識が各々自の境を縁するこ

と、次に第三釋は、現量の五識が、共相の種類等の相を縁じないことであるとしてゐる。^(九)また慈恩

はこれに就て、所縁の境が各別なることを表すとしてゐるが、して見ると、これは善珠も云ふやう

に、西明の三釋では、その第二釋に當る。つまり現量は、眼等の五識が夫々不共の色等の五境を、

各別に縁するときに生ずるのである。次に現々別に轉すと云ふは、また因明論にもその儘の文に於

て見出され、而して此の因明論の文に就ては、^(一〇)文軌の疏に、二釋に依て解釋してゐる。初めにその

第一釋は、五識が五根に依て、別々に五境を緣する場合、現量が生ずることを表す。次に第二釋は、この論文は、單に五識のみではなく、一切の現量心に通ずるとする。即ち五識、同緣の意識、自證心、

定心等に通ずるとするのである。凡そ因明論の文に就て、文軌の二釋を示せば以上の如くであるが、

それでは此の解釋は、理門論にその儘に當嵌るか、どうであらうか。これに就て慈恩疏を見ると、^(一一)

當嵌ると云ふ說と當嵌らないと云ふ說と、この二說が擧げられてゐる。若し現量を五識に限るとすれば、理門論も因明論に同じいのである。併し若し因明論は一切の現量心に通ずるとすれば、理門

論はたゞ五識に限られるから、從つて同じではないとされる。^(一二)して見ると慈恩の解釋に依れば、何

れにしても、理門論に於ては、たゞ五識に限られるとせねばならない。併し淄州の略纂に依れば、^(一三)

理門論にもまた四種の現量心が説かれてゐるとある。して見ると現々別に轉ずると云ふは、單に五識のみではなく、また一切の現量心に通ずる意味に於て、兩論ともに同じい意味を表すと見て妨げはない。つまり例へば五識の如く、その對境を明白に照す點に於て現であり、而も五識は一ではないから現々であり、また五識は夫々自境を緣じて生ずる點に於て、別に轉ずるのである。總じて云へば、若し智があつてその對境を緣する場合、一切の分別、即ち有ゆる概念作用を遠離して、直接に、自爾にその不共の境を稱可すれば、それが現量であると云へる。故にまた現量は無分別であり、境の

自相を得るのである。

(八) 明燈抄六末(大正六八、四二二)引

(九) 因明疏下末一七右

(一〇) 大疏抄第三九(大正六八、七六二)引

(一一) 下末一六左

(一二) 因明邑記(大疏抄、大正六八、七六〇引)、又明燈抄六末(大正六八、四二二)參照

(一三) 全四卷、缺、章疏錄第二參照、大疏抄第三九(大正六八、七六〇)引

更に理門論に依れば、現量は、單に五識のみではなく、また意識、自證心、定心等に於て起るとされる。また二十唯識疏に依れば、この現量の體に就て、十一説を出してゐる。初めに勝論は、徳

句中の覺を現量とし、次に數論は、十一根中の五知根、或は根本に於ては自性を現量とし、次に小乘

部に於ては、まづ世友は五根を現量とし、次に法救は五識を現量とし、また妙音は慧を現量とする

が、併し有部としては、主として世友の説を用ゐるのである。次に正量部は心々所を現量とし、次

に經部は根と識との和合を現量とし、次に大乘に於ては、先づ無着世親の二分説では、たゞ見分の

みを現量とし、次に安慧の一分説では、有漏の諸識の分別の中、隨念、計度の分別でないもの、及

び無漏心はみな現量とし、次に陳那等の三分説では、見分と自證分とを現量とし、終りに護法等の

四分説では、見分と自證分と及び證自證分とを現量とするとしてゐる。して見ると現量の體を何に

するかに就ては多くの異説が存するのであるが、併しそれは兎に角、現量は無分別の智であり、境の自相を得することに變りはない。故にまた雜集論^(一九)には、現量とは自ら正しく明了にして、迷亂なきの義なりとも云つてゐる。

(一四) 卷下二四左、因明略纂(大疏抄第五、大正六八、四五九引)

又明燈抄一末(大正六八、二三〇)參照

(一五) 義燈(三、六四右)云、覺天說、根爲現量文

(一六) 燈三云法救師、此(慧及識)皆顯故、名現(量)文

(一七) 燈三云、經部根境識和合生法、名之現量文

(一八) 燈三云、犢子部以神我現量文

(一九) 卷一六(大正三一、七七二)

次に比量に就て考ふれば、先づ理門論には、智はこれ前の智の餘にして、所説の如き能立の因より生じ、是れはかの義を緣するなりとある。現量は無分別であつて、一切の分別を離れてゐる。故にこゝに餘と云ふは、比量の智が、無分別の現量の智ではなく、それ以外の有分別の智なることを意味する。固よりこの比量智も現量智に基き、現量智が開展して比量智となるのであるが、併し自相を緣する無分別智と、共相を緣する有分別智と同一ではないから、それで前の(現量)智の餘とするのである。そして此の比量智は、因の三相——遍宗、定有、遍無——に由て、境を緣じ正しい智を得する。故に因明論には、比量と云ふは、因の三相に由て義を觀じ、生ずる所の正智であると論

じてゐる。比量とは有分別の智であつて、因の三相に由て共相の境を觀じ、得するところの正しい智である。かくてこの意味に於ては、現量は境の自相を得し、比量は境の共相を得するとせねばならない。而して佛地經を見ると、如來の妙觀察智を説いて、世界は大小輪山の圍繞せる所の如く、如來の妙觀察智もまた、一切の自相共相の圍繞せる所に愚ならずとある。して見ると如來の淨智は、單に自相のみではなく、また共相を知るであらう。然るに若し如來の淨智は、現量得であるとすれば、現量は自相を得する點に於て、たゞ自相のみを知ると考へられる。では經に自相共相を緣ずるとは如何なる意味であらうか。

(二〇)

これに就て親光の佛地論を見ると、三説が擧げられてゐる。初めに第一説は、定心は現量得であるが、而かも自相共相を緣ずる。因明に於て現量は自相を、比量は共相を緣すると云ふは、散心に於て説くとするのである。次に第二説は、定心は現量得であつて、固より諸法の自相のみを緣ずるが、併し方便として共相をも緣ずる。定心に於ては方便として、兼ねて共相所顯の理を緣ずるが、併し本來は自相のみを緣じ、而して此の點に於て現量得とするのである。次に第三説は、まづ因明の自相とは諸法の實義であり、また共相とは、宛も花を貫いてゐる縷のやうに、一切諸法に貫通してゐる名義である。然るに經の自相とは、法の自性を意味し、また共相とは、諸法の差別を表す。色は聲に對してその體性が同じではない。故にこれを自相と云ふ。然るに此の色も聲も共に無常な

る點に於ては變らない。故にこれを共相と云ふ。而して今、定心に於て無常觀に入れば、直ちに色無常と觀じてゐるであらう。色を離れて無常はなく、無常を離れて色はない。定心は自相と共に共相を緣じてゐる。つまり經に自相共相を知ると云ふは、此の意味を表すのである。然るにこれは、また現量得であつて、無分別の境である。故にこの意味に於ては、不共の境を緣じてゐる理であつて、即ち因明の自相を得してゐるのである。因明に於て、現量は自相を緣すると云ふは、此の意味に於て理解すべきであらう。故にかく考ふれば、經と論とは相通するのである(定實疏參照。^(一一)凡そ佛地論の三說を記せば、以上の如くであるが、併し此の三說の中、第三說が如實義者の說とされる點より考ふれば、親光の正意なることは言ふ迄もない。かくて因明に於ては、現量は無分別の正智であり、一切の概念作用を離れて境の自相を證得するに對し、比量は有分別の正智であつて、因の三相に由り、境の共相を比知するのである。

(二〇) 卷六(大正二六、三一八)

又唯識疏一〇本五四右、樞要上末三四左、義林章二末一七右、補闕義林(二量)章卷八(續藏二之三、三四)、

因明義斷(續藏八六、四一六)、定實理門疏(大疏抄三八、大正六八、七五四)、明燈抄六本(大正六八、四一四)、斷障

義鏡八七左等參照

(二一) 依大疏抄所引

而してこの現量と比量とは、有分別と無分別と異り、また境の自相を緣すると、共相を緣すると

四分と量智に就て

同一ではないにしても、併し何れも正しい智であり、眞量なる點に於て變らない。尤も智はつねに正しいとは云へない。眞量に對して似量も亦あるであらう。理門論には、憶念と、比度と、惛求と、疑智と、惑亂智とは、以前の所受の境に由て、様々の分別を附加するから、宛も陽焰を水と謂もふやうに、似現量を生ずると論じてゐる。直ちに實の境を稱可しないで、それ以外に様々の行解の相貌を起し、色々の分別を附加するから、從つて眞の現量ではなくなる。欲界の散心で過去を緣じ（憶

(一一)

念)、獨頭の意識で現在を緣じ(比度)、散の意識で未來を緣ずる(惛求)などは、凡て有りのまゝ以外に、更に分別が働いてゐる理であるから、從つて似現量となることは言を俟たない。因明論にも、有ゆる智の、瓶衣等を了して分別を生ずる、彼れは、義に於て自相を以て境界となさざる故に、似現量と名くとあるも、亦同じ意味を表してゐる。かくて現量の中には、眞と似と存するが、併し若し爾りとすれば、比量にも亦、眞と似となくてはならない。既に因には眞因ではなく、また似因もある。四不成、六不定、四相違などのやうに、似智を生ずる因は邪因である。故に此の似因を以て比知すれば、量智はその對境を正しく了解することはできない。山に霧のあるを見て、妄て煙と思ひ、而してそれに由て火があるなどと推知する如き、これは似比量である。故にまた因明論には、似因を以て因となし、似の所比に於て諸の有智生ず。正しく解すること能はず。これを似比量と名くとも云つてゐる。かくて凡そ以上の如く考ふれば、比量にも亦、眞量と似量とあると考へて妨げは

ない。而してこの似比量にしても、又かの似現量にしても、各々それは有分別と無分別と異つてゐるのであるが、併し孰れも、眞量ではなく、似量なる點に於て變らない。故にまた唯識論には、量(二二)と非量とありとするのである。

(二二) 大疏參照

(二三) 卷二、二八右

二

凡そ以上に於て、現比非の三量が如何なるものであるか、それは記されたであらう。而して相分は、前に記したやうに、たゞ所縁なる點に於て、三量の孰れでもない。而して見分は現比非の三量に通ずる。併し三量に通ずると云ても、八識の見分が悉く、三量に通ずるとは云へない。五八の見分は一向に現量、第七識の見分は一向は非量であり、而して第六識の見分のみ三量に通ずるのである。(二四)尤もこれは護法説に依るのであるが、それでは此の三量は一心の見分に於て、俱生するか、どうであらうか。これに就て、或は俱生すると云ひ、或は俱生しないと云ひ、古來、異説の存する所である。且らく義林章に依れば、五俱の意識は、證解する點に於てたゞ現量である。故に陳那の集量論にも、五識と俱なる意識は現量であると説くとしてゐる。(二六)これに就て義鏡を見ると、理門論の意地もまた諸の分別を離れて、證行にして轉ずることありと云ふ文を引いて、五同縁の意識は現量

四分と量智に就て

二五七

九七

なることを表すと云ひ、而してこれは三量不並の説としてゐる。次に義林章の次下の文に依れば、五俱の意識は、たゞ現量ではなく、また現比非の三量に通ずる。何故と云ふに、堅執し比度する五俱の意識が、たゞ現量とは云へないからとしてゐる。義鏡を見ると、これは三量相並の説とするのであるが、併しこの二説の中、何れが正しいか記してゐない。次に撲揚の決擇記を見ると、これに就いて、次の如き例を擧げて助釋してゐる。即ち五俱の意識がたゞ現量であれば、意識が眼識と共に色境を緣する場合、その意識は、他の耳等四識と俱起して、聲等四境を同緣することはできない。して見ると、この意識が他の聲等四境を緣するのは、現量か、比量であらうかと云ふ問を設け、これに對して、比量と云ふ釋と、現量と云ふ釋とを出してゐる。思ふに第六識が眼識と共に、色境を同緣してゐる場合、また明了に他の四境を、取得する點よりすれば、たゞ現量とも考へられぬではないが、併し意識は他の四塵を、色塵の如く同緣しない點よりすれば、やはり現量得ではあるまい。故に決擇記には、且依初釋と云つて、これを比量得としてゐる。して見ると五俱の意識に於ては、現量と比量と相並してゐることゝなり、而して此の意味よりすれば、義林章の二説に於ては、やはり相並の説が正しいとなるであらう。

(二九)

(二四) 四分義私記卷下八左、覺夢抄卷上、四三右參照。

(二五) 一本四四右

(二六) 卷一、一八右

(二七) 大正三二、三

(二八) 續藏二ノ三、五二左

(二九) 本文抄(大正六五、六五五)を見ると、清素但作初釋とある。但作初釋と云へば、これは決擇記の引文の次に記されてゐる點よりして、相並の説となることが解る。而して秋篠の序釋の奥には、清素の唯識論記一〇卷のあつたことが記され、又、東城錄には、法苑記四卷等のあつたことが記されてゐる。而して此れ等の書は、本文抄には第三(大正六五、五四三)、第四ノ二(大正六五、五五五)等にも引かれてゐるが、併しそれは兎に角、茲に引用するは、その文の、前後より考ふれば、恐くは法苑記の文であらうと考へられる。

(三〇) 次に分量決を見ると、これに就て二説をあげ、既に三量は互に相違するから、従つて一心に於て俱生しないと云ひ、また耳識の卒爾と同時の意識は、音聲と名句等とを共に緣じ、而して實有の聲を緣するは現量、假有の名を緣するは比量であるから、従つて俱起するとも云ひ、かくて並と不並との二説を出してゐるが、併しこの二説の中では、圓弘師の判に依て、不並の説を成するのである。

(三一) これは明かに義林章等の説に反對してゐる。而して四分義私記もまた分量決に同じい。ではその何れが正しいであらうか。唯識疏に依れば、五俱の意識に執ありと云つてゐる。無論、五俱の意識と云ふも、それが五同緣なる點に於ては、任運無分別であつて、現量得であるが、併しそれが不同緣なる點に於ては、現量であり、執がないとは云へない。

(三四) 集量論に、五俱の意識は現量であると云ふも、これは現量の場合もあると云ふ意味であつて、従つてたゞ現量に限られると云ふ意味ではな

(三五) 而して理門論に、意地もまた分別を離れて、たゞ證行にして轉ずることありと云ふも、これは、
(三六) 定寶疏にもあるやうに、五俱の意識に於ては、五同縁と不同縁との二があつて、その中、前者は無
分別で不共の自相を縁じ、それ故に現量得であるから、従つて證行にして轉ずる理であるが、併し
後者は同時に共縁して假の分別を起し、名言を安立するから、従つて此の點に於ては、非量得であ
つても妨げはない。故にかくの如く考ふれば、つまり一心の見分に於ては、三量が相並すると云へ
るであらう。

(三〇) 三量分別門

(三一) 三類境私記一七右には、名句等の不相應を縁するは、比量ではなく、非量であると訂正されてゐる。

(三二) 卷下八右、また眞興も、不並の説なることは、同記の終、諸門分別門に記されてゐる。

(三三) 七末三三左

(三四) 同學抄七之三、五俱意識之論義、五同縁之論義參照

(三五) 義林章の意も亦之に同じい。

(三六) 大疏抄三九(大正六八、七六〇)引

(三七)

また義燈を見ると、散の意識が頓に十八界を縁するときに、五識と同じく五塵を縁するに望めて
は、性境不隨心と名ける。七心界を縁するは、即ち通情本なり。不相應等に望めては、即ち唯從見
なりとある。これに就て増明記を見ると、五識と同縁するは即ち現量心、七心界を縁するは比量心、
(三八)
不相應を縁するは比と非とに通ずるとある。(三九) 故に此の意味に於ては、三量は相並するとせねばなら

(四〇)

ない。次に二量章を見ると、散の意識が頓に十八界を縁するとき、現量か、比量であらうかと設問し、これに對して、二解を以て答へてゐる。初めにその第一解は、五同縁の意識は現量、五根を縁する意識は比量であるとなし、次に第二解は、若し五境が勝れるならば、たとへ五根を縁しても、比量ではなく現量であり、また意境が勝れるならば、たとへ五同縁の意であつても、現量ではなく比量となり、また若し二境が齊しいならば、現量力は勝れてゐるから、従つて意識は現量に隨ふとしてゐる。凡そ二量章の二解を記せば、以上の如くであるが、併しこの二解に就て、淄州は二解俱難任意取捨と云つて、決擇を末學に譲つてゐる。いま法隆寺の和上の私記に依れば、その中、第一解は義燈の文に准じてゐるから、淄州所存の實義とされる。して見ると三量は相並すると考へて妨げはない。凡そ三量は體ではなく用である。而して見分は、前にも記したやうに、相分が多であるに従つてまた多である。かくして假令、斷常二見の如きは、堅猛なる執であつて、並生しないにしても、併し三量は並生すると考へて妨げはない。故にまた同學抄にも、此の三量並起の説を以て、相傳の正意であるとしてゐる。

(三七) 一未三〇左

(三八) 卷四(大正六五、三九七)

(三九) 三類境私記一七右與此少異、應對見之

(四〇) 補闕章卷八(續藏二之三、三五右)

四分と量智に就て

(四一) 三類境私記一八左

(四二) 同學抄二之七、三量並不之論議、又七之五、五俱意識之論議

三

かくて第六識の見分の如き、三量が俱生することもあるが、併しそれかと云つて、八識の見分は悉く三量に通ずるとは云へない。五八識の見分は無執である點に於て、たゞ現量、第七識の見分は有執である點に於て、非量である。而して若し果位となれば、八識の見分がみな現量なることは言ふ迄もない。^(二) また見分は三量に通じても、自證分はたゞ現量であつて、三量には通じない。見分は外

縁の作用であり、眞量と非量とに通ずれば、自證分はこの見分、即ち外縁の作用を縁する點に於て、或は三量に通ずると考へられぬでもないが、併し自證分は前にも記したやうに、見分が多であつても、多ではなく一である點に於て、やはり比非に通ずるとは云へない。自證分はたゞ現量であつて、^(二)

三量には通じない。同様にして自證分を縁する證自證分もまた現量である。西明に依れば、後二分は非顛倒であり、非猶豫であり、而して非重縁であるから、それでたゞ現量であるとされる。初めに顛倒に非すと云ふは、自證分が見分を縁する場合、自照明了に縁するのである。迷亂なくして、明白に審決し證知する點に於て、顛倒に非すと云ふ。次に猶豫に非すと云ふは、自證分が直接に見分を縁することを意味する。見分の所縁は一般に、本質ではなく相分である。見分は相分なる中間

項を縁することに依て、また間接に本質を縁してもゐる。然るに自證分は如何なる中間項も要しないで、直接に見分を縁する點に於て、猶預に非すと云へるであらう。次に重縁に非すと云ふは、前にも記したやうに、自證分は、見分の縁じた相分を、重ねて縁することはない。五識所引の尋求心、決定心は、卒爾心の後に起つて、その卒爾心の縁じた境を、重ねて縁するのであるが、併し自證分に於ては、このことはあり得ない點に於て、重縁に非すと云へるであらう。^(三)かくて後二分はたゞ現量である。たとへ見分は三量に通じて、後二分はたゞ現量である。

(一) 泰抄云、疏(三本五八右)於四分中八識三量者、因位五八識唯現量、第六通三量、第七唯非量、若至果位、八識皆現量又

(二) 分量決、三量分別門所引

(三) 四分義私記卷下一〇左參照

かくて右の如く見分は三量に通じ、後二分はたゞ現量であるが、併しそれかと云つて、見分は染非染に通じ、後二分はたゞ非染であり、或はたゞ染であるとは云へない。^(四)信等の心所は四分ともに善であり、貪等の心所は四分ともに不善である。然るに若し見分は三量に通じ、後二分はたゞ現量であれば、従つて信等の心所の見分は染非染に通じ、そしてその後二分は一向に不染であり、また同様に、貪等の心所の見分は染非染に通じ、而かもその後二分は一向に染であると考へられぬではないが、併し凡そ自證分は、唯識疏^(五)にもあるやうに、境に於て邪正の了解を起さないで、親く自體を明了に自照する點よりすれば、やはり見分は染非染に通じ、自證分はたゞ染、或はたゞ非染

であるとは云へない。自證分は見分が染であること(貪等)、或は非染であること(信等)、そのことを親しく自照、稱可するのである。^(六)故に此の意味に於ては、たとへ見分は三量に通じ、後二分はたゞ現量であつても、併し信等の四分は悉く非染であり、而して貪等の四分は一向に染でなくてはならない。また同様に於て、受の心所に於ても、たとへ見分は三量に通じ、後二分はたゞ現量であつても、併しそれかと云つて、苦受の心所の見分は、苦樂捨の三に通じ、その後二分は苦であり、また樂受の心所の見分は、苦樂捨の三に通じ、その後二分は樂であると云へぬであらう。苦受の四分は四分ともに苦であり、樂受の四分は四分ともに樂である。而してまた同じく、たとへ見分は三量に通じ、後二分はたゞ現量であつても、併しそれにも關らず、見分は解不解に通じ、後二分は解であるとは云へない。凡そ解と不解とは、義蘊に依れば、悟であり不執であるが解、また迷であり執であるのが不解であるが、併し解の心所の見分は解非解に通じ、その後二分は解であり、また不解の心所の見分は解不解に通じ、その後二分は不解であるとは云へない。たとへ見分は三量に通じ、後二分はたゞ現量であつても、併し解の心所の四分はともに解であり、また不解の心所の四分はともに不解でなくてはならない。かくて凡そ以上の如く考ふれば、相分は三量の何れでもなく、見分は三量に通じ、そして後二分はたゞ現量であると云へる。故に唯識論には、第二分は……或は量にも非量にも、或は現にも比にもあり。……第三と第四とはみな現量に攝むとも論じてゐる。

(四) 唯識疏三本五六左參照

(五) 三本五七左

(六) 四分義私記卷下一一右參照

(七) 卷二、二八右

四

次に理門論を見ると、此(現量)の中に於て、別の量果なし。即ち此の體が義に似て生ずるを以ての故に、用あるに似て生ずるが故に、假りに説て量となすと論じてゐる。^(一)定賓の理門疏に依ると、これは自證分の體が、義即ち境の相分に似て生ずるから、また見分の作用あるに似て起るから、それで此の意味に於て、相分見分を離れて、更に自證分の量果はないと云ふのである。いま尺を以て物を量れば、その結果として、そこに數が得られる。而して此の場合、尺は能量であり、物は所量であり、また數は量果であるが、而かも智が境を知る場合も亦これに同じい。能縁の智(能量)が所縁の境(所量)を縁じて、その境を知る(量果)のである。而して此の智即ち量果は、能量所量と別體ではない。固よりこれは既に、現量とは、その智の作用過程と、及びその結果としての智とを含むとされることに依て、知られる理であるが、而も理門論に於ては、これを自證分と見分と相分との關係に於て、解釋したのである。相分見分及び自證分は、用と體との關係にあり、不一不異であるやうに、所量能量及び量果も亦、不一不異でなくてはならない。故にまた唯識論^(二)に引かれる集量論の頌

にも、

境に似たる相は所量なり

よく相を取ると自證とは

即ち能量と及び果となり

此三は體別なることなし

と云つてゐる。

(一) 大疏抄第四〇(大正六八、七六四)引

(二) 卷二、二七左

次に大疏に依れば、諸の外道は、境を所量とし、諸識を能量とし、神我を量果とする。而して神我を量果とするのは、神我は能受者、知者であるからとされる。^(三)明燈抄にはこれを釋して、境を所量とし、智を能量とし、我を量果すると云ひ、また分量決にも同じやうな文が見出されるが、併し^(四)印度哲學研究に依れば、神我または我を以て量果すると云ふは、全く誤解であつて、たとへ我は^(五)知者、即ち量者であつても、併し量果たり得ない。我を量果とすれば、量のはたらきのないときには、我はないことになるのみならず、正理派、勝論派では、智は我の德即ち屬性であつて、決して我を智そのものとなすことはない。また數論派でも、智は自性の方面に起るもので、神我と全く別で

ある。神我は能受者ではあるが、併し決して量果としての智ではないとされてゐる。次に唯識疏に依れば、小乗は外境を所量、行相を能量、見分を量果とする^(七)なし、また分量決にもこれと同じい説が見出される。なほ大疏^(八)を見ると、有部等は境を所量、根を能量、根に依て起るところの心々所を量果とするとしてゐる。また唯識疏を見ると、小乗に六師の異説ありと云つてゐるが、併しその異説の内容は示されてゐない。いま丁義燈^(九)を見ると、三藏相傳の六師の説が記されてゐる。初めに覺天は、境を所量、慧を能量、根を量果とし、次に妙音は、境を所量、識を能量、根を量果とし、次に法救は、境を所量、慧及び識を能量、根を量果とし、次に經部は、境を所量、根と識とを能量ともし量果ともし、次に犢子部は、境を所量、心々所を能量、神我を量果とし、次に成實師は、境を所量、受と想とを能量、識を量果とするとしてゐる。いまこの六師の説を表示すれば、左の如くなるであらう。

覺	天	所	果		識	心	所	受	想	慧	神	我
妙・音	所	果	能		能							
法救	所	果	能		能					能		
經部	所	果	能		能							

體	子	所			能			果
成	實	所		果		能		

而していま此の諸説に就て考へると、能量、量果は一定してをらないが、併し何れにしても、共通なる點は、所量を外境とすることである。所量を外境とすることは、唯識説の所量と比較して、意味深いものでなくてはならない。

(三) 卷六末(大正六八、四二五)

(四) 能所量果門

(五) 卷五、六二四頁

(六) 三本四八左六

(七) 能所量果門

(八) 下末二〇左

(九) 卷三、六四右

(一〇) 義灯の本文には、「惠」とあり、而して傍註に「思」とある。普寂の略疏卷二(大正六八、三七)には、「思」としてゐる。

次に唯識説に於て、此の能所量果と四分と、如何に關係するかを考へて見たいと思ふ。初めに一分説では、大疏に依れば、自共二相を所量、量智を能量、而してこの量智が自相共相を證すること(一)は、自證明了なる點に於て、量果とするとされる。文軌疏及び因明略纂にもこの解釋は見出され、(二)(三)

(一四)

而して明燈抄は、これを安慧の義と見做してゐるから、従つてこれは能所量果を一分説に於て、解釋するものと考へて差支へはない。次に二分説では、先づ文軌疏を見ると、本質を所量、相分を能量、見分を量果とし、或はまた相分を所量、見分を能量とし、而して此の見分の審決明白なる點に於て、量果とするとされる。そして此の二分説は、四分義私記に玄範の二釋として擧げられるものに同じく、

(一五)

(一六)

また明燈抄にも、この二分説が見出され、而かもこの二分説に於ては、所量を本質とするよりも、寧ろ相分とする説が勝れるとしてゐる。固より本質は不離心なる點に於て量であり、従つて所量となると考へられぬではないが、併しまた本質は小乗の外境に等しい。また本質を所量とすれば、相分は能量、見分は量果となつて、能所量果が截然と區別されるのであるが、併し量智は前にも記したやうに、その智の作用過程と及び結果とを含むとすれば、やはり見分は能量とも量果ともなり、従つて相分は所量となると考へて妨げはない。故にこの意味に於て、二分説では、所量を相分、能量を見分、量果を見分とする説が勝れてゐるであらう。次に三分説に於ては、集量論にもあるやうに、相分を所量とし、見分を能量とし、自證分を量果とする。(一七)而して自證分は見分の能縁なる點に於て、また自證分は能量、見分は所量とも量果ともなると考へられる。加之、見分が量智の作用過程と及び結果とを含むとすれば、所量とも量果ともなると考へられぬではないが、併し若し見分がたゞ現象ではなく、また三量に通ずるとすれば、やはり量果となるとは云へない。量果は自照明了でなく

ではならない。故にこの意味に於て、第三分の外に、更に第四分が量果として措定されねばならぬことにもなるが、併し自證分が能量となり、見分が所量となるとき、見分ではなく自證分が、量果となるとも考へられる。而して此のことは、前に二分説に於て、見分が能量とも量果ともされることを考ふれば、當然に許されてよいであらう。

一分説
 所量——自相共相
 能量——量 智
 量果——自照明了

説分三		説分二		
二	一	二	一	質
			所	
	所	所	能	相
所	能	果能	果	見
果能	果			自

次に四分説では、初めに(A)相分を所量、見分を能量、自證分を量果とし、また(B)見分を所量、自證分を能量、證自證分を量果とし、また(C)自證分を所量、證自證分を能量、自證分を量果とし、また(D)證自證分を所量、自證分を能量、證自證分を量果とするとされる。^(一八)併しこの四分説でも亦、

前の二分説に同じく、能量を量果とすると考へられる。尤も四分義私記には、能量と量果とは別體であるから、それで能量は量果とならないと云つてゐるが、併し陳那は能所量果の三が別體ではないとする點よりすれば、能量、量果は別體であるから、それでこの點に於て、能量は量果とならぬと云へない。既に量智と云へば、その作用過程と結果とを含み、而して所量を以て量果とすることが可能であれば、また當然に能量も量果となつて妨げはない。加之、二分説に於ては、見分が能量とも量果ともされ、茲に能量は量果となることが示されてゐる。故に此の意味よりすれば、前掲のB類に於ては、(b)見分を所量、自證分を能量とも量果ともする場合、またC類に於ては、(c)自證分を量果、證自證分を能量とも量果ともする場合、またD類に於ては、(d)證自證分を所量とし、自證分を能量とも量果ともする場合の三類を生ずるであらう。固より見分は、能所量となるにしても、併し三量に通ずる點に於ては、量果とならない。いま總じてこれ等の關係を表示すれば、左の如くなるであらう。

量能	量所	相	分	見	分	自	證	分	證	自	證	分
	A											
A					bB							
Dd												
bB						c	C					
	Dd											
c	C											

果量			
		dA	
		Cb	
		D	
		c	B

(一一) 卷下末二〇左

(一二) 卷二(大疏抄第三九、大正六八、七六三引)

(一三) 同上大疏抄引

(一四) 六末(大正六八、四二六)

(一五) 卷上三一右

(一六) 私記には、これを分量決所引としてゐる。併し現流の分量決には、第二釋のみであつて、第一釋は引かれてゐない。

(一七) 大疏卷六、文軌疏卷三、明燈抄六末、分量決、能所量果門參照

(一八) 唯識疏三本五一左、分量決、能所量果門、四分義私記卷上二八左、明燈抄六末等參照

(一九) 同私記卷上二八左八

五

凡そ以上に於て、四分と能所量果との關係は記されたであらう。能所量果は、唯識說に於ても亦、一分說乃至四分說と異なるに従つて、その意味する所も變る。所量は、一分說では自相共相、二分說では相分、三分說では相分見分、而して四分說では相分見分自證分及び證自證分となり、また能量は、一分說では量智、二分說では見分、三分說では見分自證分、而して四分說では見分自證分及び證自證分となり、また量果は一分說では量智の自照明白なる點、二分說では見分、三分說では自證

分、而して四分説では自證分證自證分となる。かくして能所量果は、以上の如く、夫々その意味内容を異にするが、併し何れにしても共通なる點は、相分若しはそれに相似するものが、所量とされることである。固より二分説に於ては、相分ではなく本質を、所量とする考へ方もないではないが、併し此の考へ方は、相分を所量とする考へ方に比較して、餘り相應しくないとされる點よりすれば、やはり唯識説としては、重んじなくともよい理であつて、從つて相分若しは相分的なものが、所量とされると考へて差支はない。而して小乗部派に於ては、何れも外境を所量とする。小乗の謂ゆる外境は、唯識の本質に相當する點よりすれば、やはり唯識説は、能所量果の考へ方に於ても、小乗よりも更に内在化の傾向を帯びてゐると云へよう。

而して若し見分が現比非の三量に通ずれば、決してそれは量果とならない。無論、二分説に於ては、見分が審決明了な點に於て、量果とされるのであるが、併しそれかと云つて、見分が非量なる點に於て、量果となるのではない。故にかくの如く考ふれば、見分の外に更に自證分が、當然に立てられる理であつて、三分説に於て、見分が能量となる場合、量果として自證分が立てられるのは、この意味に於てもまた解釋されるであらう。而して若し自證分が能量となれば、固より見分が所量となるが、併し見分は前に同じく、三量に通ずる點に於て、また量果とならない。故にこの意味に於て、自證分の外に更に別に、量果として證自證分が立てられることとなる。それ故に唯識疏には、
(一)

現量(自證分)は比(見分)が(量)果となれども、比は現が果とはならず。比と非との二種は體(自證分)を證するには非ず。何ぞよく現量が果となることを得むとも云つてゐる。かくて比非の見分は量果とならぬのであるが、併しまた見分は現量であつても、量果とならないのである。五八識、或は定中の意識の見分の如き、たとへ、それは現量であつても、また外縁の作用なる點に於て、量果とならない。故にまた唯識疏^(二)には、見分は外縁の作用であるから、従つて内を縁する果とはならないとも云つてゐる。かくて此の意味に於ては、眞如を證する正體智の見分も亦、量果とならないであらう。無論、眞如は外でなく内であり、而かもこれを證する見分は、相分なくして、直ちに眞如の體相に契會するのであるが、併し若し見分が外縁の作用であれば、従つて眞如を證する見分を例として、直ちに見分は内であり、量果となるとは云へない。^(三)かくて量果となるは、四分説では、自證分と證自證分とに限られる。而して果位に於ては、後三分は遍縁し、また應に隨つて影像を變ずることは、前にも記した如くであるが、併し後二分のみ、心品の自體なる點に於て、量果となるであらう。^(五)

(一) 三本五〇右

(二) 三本五四右

(三) 唯識疏三本五四右參照、但し此の中の疏文に、亦不得緣(同右五)とあるに就て、祕、泰抄、學抄などは、亦不得緣眞如の意味とし、而して邑、松室等は、亦不得緣自證分の意味としてゐる。今は法隆寺の和上の判に従つて、邑等の釋に従ふ。

而して若し自證分が能量となる場合、見分が所量となり、證自證分が量果となれば、次に證自證分が能量となる場合、固より所量となるは自證分ではあるが、併し量果となるは、自證分ではなく、寧ろ第五分と云ふ如きものではなからうか。將して爾らば、またこの第五分が能量となる場合、更に第六分が豫定せられ、かくてそれは無限に繰返へされるであらう。思ふに此の考へ方は、第四分が指定される理由と、第五分が豫定される理由と、同じいとする考へ方に外ならない。前にも記したやうに、量果として第四分が立てられるのは、第二分が三量に通ずる點に於て、量果とならないからである。然るに此の理由は、同じく第五分を立てる理由とならない。何故と云ふに、第四分が能量となる場合、第三分は所量となるが、併しまたそれは現量なる點に於て、充分に量果となり得るからである。かくて四分は、能所量果の關係に於ても亦、必要にして且つ充分な分量とせねばならない。四分は不増不減である。第四分が能量となる場合には、第三分が所量とも量果ともなるのであるが、併しまた逆に第三分が能量となる場合には、却つて第四分が所量とも量果ともなり、茲に循環論 Zirkel が成立する。凡そ循環論は完成された知識である。知識がそれを根據づけるのではなく、寧ろそれに依つて根據づけられるのである。而してそれが四分に於ては、無ではなく却つて

有として立てられる。否定的なものではなく、却つて肯定的なものとして措定される。故にこの意味に於ては、後二分が循環論をなすことは、極根の肯定を表してゐるであらう。空觀說では極限の否定、即ち否定の飽和に於て、眞なるものに觸れてゐるが、唯識說では極根の肯定、即ち肯定の完成に於て、實なるものが顯はされるのである。